

何かを語りたいた時がある。例えば、よろこびを分かち合いたい時。辛いことについて共感してほしい時。自慢して優越感を得たい時。大きな街のカフェでは休日、いろいろな年代の男女が自身について語り合っている。隣の席で交わされる会話を耳を澄ましてみると、とにかく消費してしまいたい何かがあつて、誰かに向かつて語りつくすことで、心のうちをすっきりとさせている様子が良く分かる。語ってしまえば、いろいろは消えてなくなるのだ。生活の澁みは少し減って明日からの毎日をまたやっつていこうという気になれる。あるいは感情の処理としての語りではなく、知識や情報を交換し、自らの考えについての論理性を確認するために語ることもある。語りあつた内容は語り手と聞き手双方に蓄積され、それぞれの活動をより豊かにさせる。この種の語りは書くことも親和性が高い。古代の哲学者が先生の語る内容を書物に記したように、書き残すことで語りの成果を反芻したいと思う時もある。では、自分の人生について書き残したいと願う気持ちとはいかなるものであろうか。インターネットのブログを見てみると、闘病中の人や何か困難を背負った人のなかには、自伝を書いて出版したいと公言する者がいる。完全に病気が回復するなり障害を克服するなりして、一般的な人たちと同じような生活を取り戻した人、あるいは就職活動に失敗して苦労していたが運良く条件のいい仕事先が見つかり会社勤めが上手いっている人の場合は、そもそも自分の困難についてのブログを書くことも少ないし、自伝を出したいとも言わない。病気が最悪だった時代は抜けたが不完全な社会復帰で未だ格闘中の人、就職先が見つからずフリーのライターにはなれたものの大企業へのこだわりを捨てられない人などが、自分の病気を中心とした自伝や労働問題に絡めた自伝を書き、自費で出版したり実力があれば出版社から本を出したりする。彼らはまず第一に語るることによって消費してしまいたいモノを持っているのだ。同時にその決して愉快ではないモノについて書いて残したいとも思っている。単に自己顕示をしたいだけでなく、自らがまどつているモノについて共有されたいと願う。そのモノは愚痴を吐き出すように消し去りたい何かでありながら、友との充実した議論のように記録して反芻したい何かでもある。このようにして書かれた文章は、自らの刻印についての話であつて、自分に不幸をもたらしたはずの刻印を消し去るのではなく、己を特徴づけるものとして人々に開示し、何か大切なところに保管しているように傍目には見えるのだ。思いどおりにいかない者の自伝は、書き手自身が自分の人生に納得し、受け入れるための作業として書かれ

ているようにも思える。いったいどこまで読み手を意識しているのだろうか。自分を良く見せようとの意識は働いていても、読む側にとっての快楽まで計算されているのだろうか。自分を理解してほしいとの強い思いが先走っていないだろうか。

自らについて文章を書くこと、それは私小説と呼ばれる芸術表現においても行われる行為だが、困難にある者の自伝とは根本的に意識が異なる。何でもない自分についての日常をいささかの暴露を含みながら記述することが文学になりうるというのが私小説成立時の発見だったわけだが、自伝の場合、どこかで自分は特別な存在であるとの選民意識が働いているのではなからうか。不幸に見舞われ困難を背負っているけれども、自分は市井の人々から単に劣った存在であるのではない、自分は不幸に選ばれた人間であり、ゆえに自らの不幸は書物として記録され、人々に読まれるべきである。困難者の自伝についてはこの種の論理が、本人が自覚しているかどうかは別として、背後に敷かれている。ある種のうぬぼれがそこにはある。そのうぬぼれは生きていくために必要なものだ。なぜ自分だけが困難な人生を歩まなければいけないのか。不幸を引き受け、困難の苦痛に耐えるためには、どこかで自分は選ばれてあるのだと自覚できなければ、もう崩壊してしまうのである。学校で習った防衛機制という心理学用語を思い出してしまうが、耐えられないものに耐えることを余儀なくされている人の気持ちを察すれば、仕方ないことだろう。

では、不幸の体験は小説の主題たりえるだろうか。理論的には然りと答えられるだろうが、書店や図書館の棚を見渡してみても、全くないわけではないものの、不幸の体験を描いた文学作品というのは限られてくる。困難者が自伝を書く時の意識で書かれた文学というのは少なく、なぜなら作家は世で認められるほど、困難者が持っている種類の足掻きの心情を忘れてしまうからかもしれない。不幸の体験者が持つ切実さは創作にとって邪魔であり、読み手にとって面白く書くという客観性を損なってしまうのだろう。不幸に見舞われ、その不幸から脱することもできないまま文学を書いた作家、小林美代子について論じようと思う。書くことの本質について考えた

■祈りの向こう側

小林美代子は一九七一年五十四歳の時、第十四回群像新人文学賞を受賞した。受賞作「髪の花」は精神病院が舞台で、主人公はその閉鎖病棟に閉じ込められた患者らのひとりである。一貫して描かれるのは、精神を病んだ者の苦しみだ。患者たちは二重の方向から苦しめられていて、まず精神の病そのものがもたらす苦痛がある。あ

る女は、女子病棟の各病室の床下に男たちが潜んでいて、夜、患者たちが熟睡したら一斉に犯し始めるといふ妄想にとらわれ、恐怖のあまり体がこきざみに震えている。患者は具合が悪い時、妄想に覆われていて、妄想はたいがい自分が被害者になっっているものだから、患者は疲労困憊してしまう。そんな辛い病気を治療するために病院に入院しているはずなのに、病院生活は決して安楽なものではない。看護婦が圧倒的権力を振るい、医師は患者と向き合うことはなく、患者は病院というシステムによって徹底的に貶められた存在なのだ。治療施設なのか単なる収容施設なのか、精神病院の実態を告発するかのようには、美代子は内部の様子を詳細に綴っていく。「髪の花」を表題作とした作品集の後書きに、美代子は「引き取り手がないために、全快してもなお十幾年を病院に閉鎖されている方々が今なお多くいることと、その望みのない生を社会に訴え、何らかの救済措置が講ぜられることを祈って、書きました」と記していて、この小説は文学的野心のみで作られたものではなく、社会へ向けたある種の運動としての意図を含んでいることが窺える。主人公の名は「貝塚ふさ子」である。貝塚という古代人にとっての生活の歴史そのものの意味を持った姓と、さらにそれが「房」となっているのだから、歴史物がたくさん群がっている様子を表した名、そんなメタファーを読みとることも可能だが、実は彼女は病院に入る以前の記憶が全くない。歴史を一切もたないふさ子は病院のなかから手紙を書く。小説は「母上様、三回目の手紙をさしあげます」という書き出しで始まり、名も住所も知らない母へ向けての書簡という形式で小説は綴られる。手紙の宛先は口について出てくる「目黒区八雲二丁目二番地」で、実際そこに何があるのかも知らない。彼女の名前の由来は「貝塚」という場所で保護されたため、福祉事務所の所長の名と合わせて、決まったものだという。ほんとうに前後不覚で自分の年齢すら分からない。そんなふさ子は十八から入院している少女「りえ子」と友達になる。小説のタイトルも、髪を結うのが好きなりえ子が同じ病室の女たちの髪を結っていく様子があたかも「病棟に沢山の髪の花が咲いてゆく」ようであったことからきている。小説の後半はりえ子を中心とした話であって、まだ若い彼女には酷すぎる運命が記述されていく。

いったいふさ子が手紙を書いている相手の「母」とは誰なのだろうか。主人公はなぜ身の廻りを文章にして病院の外に送信しなければいけないのか。

社会から隔離された存在であるふさ子にはかつての記憶がなく、それは彼女が胎児のような立場にすることを意味している。精神病になる前と後には遮断があり、病院での生活は病者としての自意識を構築していく作業でもある。貝塚ふさ子は自らのアイデンティテ

イについて、貝塚を形成していくように精神病院の中で組み立てているのだ。貝塚は生活の記録ではあるが、同時に遺棄されたものの積み重ねでもある。ふさ子が捨てているのは、可能性だ。一般の社会のなかで暮らしているなら持っていたであろう色々な可能性を捨て、病院のなかでおそらく一生を過ごさなければいけないだろう現実、実に適応しようとしている。彼女が病前の記憶を持っていないのも、精神病院への入院とは生まれ直しであり、そんな記憶は今後の生涯にとって何の意味も持たないからだ。ふさ子には病院生活が社会のすべてであり、作中ではそこから解放される萌しはない。自らは看護婦に生活を管理された病者でしかなく、それ以上の何者でもないのだ。けれど、その諦念を持つのは容易ではない。困難を受け入れるため、ふさ子には顕示させないといけないものがある。しばしば深刻な病気を患ったものが自伝を書き残したいと願うように、ふさ子も自分についての記録、病院に入る前の記憶がない彼女にとっては病院で見聞きしたことが人生の全部であるのだが、それを文章にしていくなのだ。この場合、書いた文章は読まなければ意味がない。現実を受け入れる諦めと引き換えになる承認が、自己を保つために必要なのだ。この種の承認は実際には得られないことのほうがはるかに多い。だから困難を強いられた人は、忸怩たる思いと悔しさに塗れ、それでも生活の中で折り合いをなんとか見つけ出そうとしていくものなのだが、自己を再認識する段階でやっぱりこの承認を求めてしまう。病院に閉じ込められたふさ子にとって、病院の外に向けて手紙を書く必要があったのはこのためである。これからの人生を病院で過ごす覚悟と交換に得たいものがあつた。認められたい思いがあつたのだ。生まれ直しの最中で、胎児としてのふさ子にとって、社会と繋がっている存在とは「母」だった。胎児が胎盤を通してのみの世界と繋がっているように、ふさ子は母を通して、世界から承認を得ようとする。母へ向けての手紙は、胎児にとっての臍帯と同じで、胎児の命がそれによって保たれているように、ふさ子も手紙を書き送ることで、自らの魂を保とうとしているのだ。そして、書くことで得たいものがあるのは、小林美代子も同じである。美代子は五年間、精神病院に入院していた。「髪の花」は退院後に書き上げられたものだ。病気によって何もかも失ってしまった自分を再構築するために、美代子は小説を書くことにした。それはただ書かれるだけでは不十分で、人々に読んでもらう必要があつた。社会からの承認が必要だつた。自らの尊厳は、自分の頭のなかだけで作りあげることではできない。人としての尊厳は、社会から自分がどう扱われるかという問題であり、常に社会と対峙している。自分が自分の人生に納得するには、社会から自らの人生を認めてもらう必要が絶対にあるのだ。だから美代子は書いた小説を新人賞に応募し

た。群像新人文学賞の受賞の言葉から引用しよう。

入院で、自分を代表していた魂、自分にも他人にも、これが私だと示していた人格を、一切失って、空の肉体だけで世に戻ってきました。魂のなかった私の肉体への魂の火入れ式は今度の受賞でした。受賞によってようやく新しく誕生できます。今度こそ、自分の願う自分を作ってゆきたいと思います。

小林美代子「受賞の言葉」より抜粋

小説の主人公ふさ子が母という社会へ向けて文章を書き、生まれ直しをしようとしたように、小説の作者である美代子も同様に「髪の花」を書いて、精神病院退院後の自分について生まれ直しを果したのである。

病気になることで生まれ直しを強いられるのは、もちろん病気の症状も原因であろうが、社会的な要因も大きい。精神病に対して薬物療法が有効になったのは第二次世界大戦後のことで、戦後、次々と新薬が開発され、精神病は歴史上初めて治療可能な病となった。しかし、かつての日本では経済的理由から高価な薬を必要な量だけ使うことも難しく、精神病院での治療は決して満足なものではなかった。当時は病院側の人権意識も低く、患者への抑圧も大きかった。「髪の花」が発表される前年の一九七〇年三月、朝日新聞夕刊に連載された「ルポ精神病棟」では、新聞記者がアルコール中毒を偽装し精神病院に患者として入院し、当時の精神病院の陰惨な実態を暴いた。美代子の入院生活についても過酷な面もあったのは確かで、それがいつそう彼女に生まれ直しをつよく強いたのかもしれない。「髪の花」を一九六〇年代の精神医療の実態を反映した当事者による貴重なルポルタージュとして読むことも可能である。実際、新人賞の選評で大江健三郎はこの作品を「なまなかのことでは動かしがたい、ひとつの証言」であるとして記録的側面を評価した。選考委員は他に野間宏、安岡章太郎、それに江藤淳で、もっとも「髪の花」を強く推したのは江藤であった。「この作品の新味は、狂気を自己主張あるいは自己顕示の手段と心得ているかのごとき幾多の現代小説のなかで、狂気の苦しさというものを描き出している点にある」と評し、作者の切実さに向き合おうとする。

近頃では、狂人のほうが正常人より純粹だとか、むしろ現代社会の“歪み”が狂人によって告発されているのだというような言説をなす者が、専門の精神科医のなかにさえときおり見受けられる。インテリの寝言とはこのことであって、こういう曲学阿世のともがらは、狂人のなかにひそむ治りたい願望について、

一掬の涙すら注ぐことができないのである。(傍点引用者)

江藤淳「選評」

精神病患者を単に社会から疎外された存在としてのみ考える言説は、病者自身が味わっている苦しみの半分しか理解しようとしていない。社会が病気に与えた隠喩によって患者は苦しんでいるのだと述べたとしても、その言葉は社会に適應している人々に対して戒めの言葉となつて届くだけで、今実際に困難にある者たちの側には向いていないのだ。病によって苦しめられている人間は、その苦しみの原因が何であれ取り除きたいと願っているし、病気の回復を心底祈る。社会が精神病患者を差別しなくなれば、まるで病者には一切の苦しみもたらされないかのごとく述べる言説が流行した時代もあったが、そういう言説を生み出す者こそが病者を自分たちとは異質の人間であると看做していると思う。健康な人が風邪で高熱を出して寝込めば、病気の回復を心待ちにするは当然で、精神病の場合も同様に病者自身がいちばん病気の回復を願っているのだ。高熱によって普段の仕事ができなくなるように、精神を病んだせいでも今までできていたことが上手くいかなくなるのは病者にとつても辛いことだろう。病気が回復して市井の人たちと同様の生活を送りたいとも願う。現実には病がそれを難しくするので、困難に見舞われた者は、困難を引き受けるために、その困難についての自伝を書こうとするのである。

江藤は選評で「作者が生きていることへの謙虚さを持ちつづけている」と書いた。狂気を見せ物のように売り物にする小説が幾多あるなかで、「髪の花」はえんえんと苦しみを描写していった。生き続けるための作業のひとつとして作中のふさ子は手紙を書き、美代子はこの作品を書き上げたのだ。その入れ子構造は作者にとつての切実さによって成功したのだし、江藤が「謙虚」という言葉で示したものはきつと、困難な現実を受け入れると同時に生きていくための希望も捨てない、背反する事柄を同時に引き受ける静かな覚悟なのだろう。絶望的な現実においても、ふさ子は自殺を否定し生きていこうとする。引き受ける家族もないふさ子が病院を退院することは、たとえ病気が回復したとしても、当時の社会では望むことができないだろう。しかしふさ子はひそかに祈っているのだ。いつか奇蹟がやってくるのではないか。根拠は何もない。若い患者のりえ子はその奇蹟を信じてできなかった。現実を受け止めることは、希望のまったくない絶望でしかなく、生きる動機を見つけないこともできない。りえ子には最悪の結果がおとずれるのだが、死を選ばなかったふさ子との違いとは、祈りがあつたかなかったかだろう。りえ子の母親もまた発狂し別の病院に収容されるのであるが、それを見

舞いに行ったりえ子について、次のように書かれている。

りえ子は正常な人間の側に立って、見舞客として同病の患者を見る時、相憐れむよりも、自分だけはこの仲間から抜け出したいと切に思った。自分の正気が自分の狂気を軽蔑し、許さないのである。自分の正気の冷たさにぞつとしながらも、同じ病気の仲間を許せない気がした。発病して待つ何物もないのに、何かの僥倖を待っている。限りなく待っている。その甘さが許せないのだ。(傍点引用者)

小林美代子「髪の花」

りえ子は同病の者たちが祈りを持っていることを軽蔑した。彼女は現実を受け入れていないのではない。現実をあまりに冷静に捉えているため、自身の病についても客観視してしまうのだ。つまり現実を受け入れすぎているのである。客観的に見れば、自分にはもう全くの可能性が潰されているので、生きていくための希望はどこにもない。そんな状況では人間は生きていけない。現実から逃避して奇蹟を信じる部分はどこかにないと困難に押し潰されてしまう。ふさ子が誰に届くかも分からない手紙を書き続けるのは、奇蹟に賭けているからだ。諦念を完全に自分の内側に据え置くまでは、それは死を前にした老人と同じ心境であるが、困難に対し足掻き続けなければ、生きる動機を保てない。生のために祈りを持たなければいけない。油断すると、いとも簡単に死を選んでしまうから。

*

『群像』六月号に「髪の花」が掲載されると、新聞などにいくつかの評が出た。異世界であった精神病院の内部を描いた小説として多くの評者の興味をそそるなかで、佐伯彰一は北條民雄と比較し、「ほくは、戦前の北條民雄の小説を思い浮かべたりしたが、小林氏は、北條の場合と異なって観念的な昇華よりは、ひたすら即物的な定着によって、古典的な女流日記に見られる繊細な執拗さともいえるべき効果を生み得ている」と美代子の文学について分析した。

一九三四年十九歳で全生病院に入院した北條民雄は、院内から川端康成に手紙を書き、書いた小説を見て貰うことになる。翌年に「間木老人」が文學界に掲載され、北條の代表作「いのちの初夜」をはじめとする幾つかの作品が川端の手を通して世に発表された。北條の作品について同時代評を読むと、おおよそ二通りの形で批評されている。「いのちの初夜」について「異様に単純な物語を語っている。こういう単純さを前にして、僕は言うところを知らない」との感想を述べた小林秀雄のように、作者にとつての切実さを評価した

ものと、丹羽文雄らが言うように、記録としての価値は認めるが、題材が特殊すぎるから文学としての普遍性を持たないのではないかという批判である。この二種類の評価はひとつの硬貨の裏表のようなもので、前者のように肯定的に評価するのも、世の中の多くの人々が体験することのない「特殊な世界」を描いたからこそ、その作者の切実さが素朴な形で文学を形作っていると考えているのである。後者の否定的な評価は、その特殊性を難じている。そのような世界を描いた作品であっても、作品がその特殊性を突き破る価値を持っていれば、このような評価から逃れることができるわけだが、果たして北條民雄の文学がそこまで力を持っていたかは疑わしい。確かに北條の小説は当初ベストセラーになり、戦後もある時期までは読み継がれてきた。しかし現在、北條民雄の小説はアンソロジーとして文庫に収録されているだけで、新刊書店には北條民雄の文庫本は並べられていない。時代は北條民雄の文学に普遍性を認めなかったのだ。それは北條が患った「癩」、つまりハンセン病を取り巻く社会状況が一変したことと関係があるだろう。病気が薬により完全に治療可能となり、病気を怖れる必要がなくなった。患者への隔離政策は確かに長期に及んだが、それも二十世紀の終わり頃には撤廃された。北條民雄が読まれていたのは、異世界を描いた記録としてであり、社会の状況が変わり、その異世界が成立しなくなったなら、情報としての価値も薄れたのだ。今でも北條の小説群には当時の社会がハンセン病をどう扱ったか記録としての価値はある。けれど、あくまで過去の話である。同時代の人々が好奇心をもって恐る恐るのぞき見したような、卑俗な価値はもうない。小林美代子の小説は、北條民雄のものとは、文体も違うし、佐伯が言うように書かれている意識も異なる。一九七一年に講談社から出版された小説集『髪の花』はロング・セラーとなり、一九八四年の時点で十一刷となっているが、やがて北條の作品と同様に絶版となり書店から消えた。精神病の治療技術が進み、病院の処遇が改善されていくなかで、「髪の花」で描いた異世界は同時代の日本には存在しなくなり、人々の関心も薄れたのだろう。やはり美代子も北條も同様の読まれ方をされていたのではなからうか。困難にある者が、その困難を題材に文学を作っても、異世界についての情報として消費されるだけで、時代の変化に淘汰される運命にあるのだろうか。今あらためて小林美代子を読むことの意味はどこにあるのか。

プラトンは『国家』第十巻で詩人追放論を訴えた。ここでは芸術を批判するため、ある喩えが述べられる。椅子のアイデアがある。椅子職人は椅子のアイデアに似せて実生活で使用する椅子を製作している。画家は椅子職人の作った椅子を見て真似て椅子の絵を描く。芸術の創作物とは、アイデアを真似た実物、それをさらに真似たもので

あつて、「真実という王から遠ざかること第三番目に生まれついた素姓の者」なのだ。

ホメロスをはじめとしてすべての作家たちは、人間の徳——またその他、彼らの作品の主題となるさまざまの事柄——に似せた影絵を描写するだけの人々であつて、真実そのものには決して触れていないのだ。

プラトン『国家』（藤沢令夫訳）

この時、プラトンが前提としているのは、アイデアを真似てできた實際を皆が共有できているということだ。アイデアは不可視であり、私たちが取り扱っている實際はアイデアの模倣品にすぎない。その模倣品をさらに模倣したのが芸術作品であるわけだが、そんな真実から遠く離れたものを用いなくても、実際にあるものについて論じればいいだけではないかとプラトンはいう。皆が椅子という道具を知っていて椅子が目の前にあるならプラトンのいうとおりだろう。しかし椅子の存在を知らない人々に対してはどうだろうか。椅子を知らない人々に椅子について伝えたい。だが椅子そのものを手に入れることができない状況にあつたなら。この時、たとえ創作物が影絵のように真実に対して不誠実であつたとしても、創作物にしか真実にたどり着ける道がないのである。社会の少数者が直面する困難について描いた作品を読む時、多くの人々にとって、アイデアを真似て作つた椅子そのものであるような現実体験しようがないものなのだ。真実という王から二番目のところについて触れることができないからこそ、たとえ三番目のものであつたとしても、創作物は価値を持つ。しかもただ記録としての価値があるだけではない。椅子を知らない人間が椅子の絵だけを見ることで、椅子についての想像がふくらみ、椅子のアイデアにより強く焦がれることがあるのではないか。創作物であることでアイデアへの恋慕は強くなり、第二の姿を知らないからこそ、よりアイデアと直結しやすくなるのではないか。アリストテレスは創作は人間の本性に根ざしているという。模倣することと模倣されたものをよるこぶことは、人間に備わつた自然な傾向であり、醜い動物や人間の死体のように実物を見るのは苦痛でも、それらを正確に書いた絵であれば、見てよろこぶ。「髪の花」ではどこまでも悲惨なあり様が描かれている。これが単なる精神病院の内部を描写した記録であれば、大多数の人々にとって読むことを避けたいものになる。創作物という手段をとつたからこそ、美代子の思いは伝わりやすくなつたのである。真実に到達できる道を指し示す創作物は、情報としての価値を超え、時代に打ち勝つ可能性を持つているはずだ。

「髪の花」を読むことで到達することのできる真実のひとつに祈りがある。この小説で表現される祈りは、時代によって風化しない普遍性を持っていると思う。その祈りは、困難な状況にあるからこそ純化されたものであり、小説という形をとったからこそ私たちの前に切実さを伴って提示されるのだ。祈りの向こう側に何があるのか定かではなくとも、もはや手段としてではなく目的として人が祈る時がある。「髪の花」を読むことは祈りの現場に立ち会うことだ。書かれた当時とは社会や病気を取り巻く状況が大きく異なってきた現在、この小説の祈りは私たちの前に姿を見せはじめたのだ。もう一度、読まれるべき条件は整いつつある。

■生きてきたあかし

ソポクレスに「コロノスのオイディプス」という作品がある。死を目前にした偉大な作家が書き上げた悲劇は、歿後、孫の手によって上演された。これはソポクレスの最高傑作「オイディプス王」の後日譚で、実父殺しに気付いたテーバイ王オイディプスは両目をえぐり国を追われるが、長い放浪の末、アテナイ郊外コロノスの森にたどり着いたところから、物語ははじまる。悲劇はオイディプスが得たアポロンの神託を中心に繰り広げられる。その神託とは、彼が死ぬことになった土地に恵みがもたらされるといふものだ。彼の二人の息子は対立し、戦争によって結着をつけるべく準備を進めている。それぞれの息子が、神託の力を自らのものとしようと、オイディプスに自分の方に味方して欲しいと頼みにくるのだ。そんな息子らを追い返し、オイディプスはコロノスの森で死ぬことで、アテナイに祝福をもたらず道を選ぶ。

神々に運命を呪われたオイディプスは、父殺しが発覚した後、人々から忌み嫌われた存在となったわけだが、彼に用意された和解の手段とは死であった。死ぬことでオイディプスは人々から尊敬を取り戻したのだ。死の場面は直接的には描かれず、彼がどのように死んだのかは定かではない。ただ死を覚悟して自らの意志で森のなかに歩んでいったあと死が与えられたのであり、死を選び取ったのだといえよう。結局、オイディプスは生きていくうちに不幸から解放されることはなかった。自らの死だけが困難の解決手段であり、死を期待されていた。困難な運命を課された者に最後まで救済は訪れず、死だけが希望として輝いている様は本当に悲劇だ。けれど、彼の死は決して敗北ではない。物事を解決する手段であり、栄光を得るための死。その死を受け取る覚悟があったなら、死を怖れることはない。

それは死を美化している、実際は死ねばすべてが終わりになるのであり、死は避けるべきではないか。通常の道徳からはそのような

批判があるだろう。確かに多くの人々にとって、死は何もたらさない。しかし、困難にある者にとっては、現実を冷静に見れば見るほど、死しか不幸と和解する手段がない現実は存在しうるだろう。死より深刻な不幸は現にある。オイディプスは死後の栄光が用意されていただけまだ救われているほうで、死によって得られる尊厳すらなくとも、死に恋するしか現実をやり過ごせない過酷に見舞われた人が死を選んだとしても、いったい誰に批判の権利があるだろうか。生きていくことは難しい。一歩手前でなんとか踏み止まっている人であっても、ふとした切っ掛けで自殺することがある。昨日までは死に打ち勝つための祈りを持っていた。朝起きたら雨だった。なぜだか分からないが、もう奇蹟を待つことはできないと思った。死がただそこにあった。

オイディプスの死が、よくある困難者の自殺と違うのは、彼が選ばれてあることだ。不幸にある者は、不幸に選ばれてあるのだとの選民意識を持つことが多いが、それはうぬぼれにすぎないのがほとんどである。だが、不幸に選ばれてある人は実際にいる。小林美代子もそのひとりだろう。自らの不幸について世界に晒すことで栄誉を得た。数少ない不幸の選民として、美代子もまた死の魅力について考えざるを得なかった。

小林美代子は新人賞受賞の二年後、自ら死を選び取った。一九七三年九月二日付の新聞によると、一日午後三時ごろ、小林宅から異様な臭いがすると近所の人が警察に通報、署員が駆けつけドアをこじ開けて入ってみると、ワンピース姿で布団の上に仰向けになっている死体が発見された。新聞受けには先月十九日消印の手紙が入っていたことから、そのころに自殺したものと思われる。

枕元には睡眠薬の空き瓶と遺書が残されていた。美代子は新人賞の受賞後、精神病院に入院していた経歴と、その小説の内容から、特異な経験を持った作家として一躍注目を浴び、新聞や週刊誌のインタビューはもとより、昼過ぎに放送されるテレビのワイドショーにも小学校時代の恩師とともに出演している。生涯独身で一人暮らしをしていた美代子のところには、受賞後、新聞に掲載された美代子の住所をたよりに、同病の者やその家族が、病気や生活の相談にひっきりなしに訪ねてきていた。取材への対応や、病気についての相談事に忙しい毎日が続き、受賞してからもいくつかの短編小説を書いていたようではあるが、生前に公となったのは、受賞作と受賞前『文芸首都』に発表していた作品を纏めた小説集『髪の花』を除けば、自伝の長編小説『繭となった女』一冊だけである。

美代子の死が明らかになってから約一ヶ月後、十月七日発売の『群像』十一月号に遺稿「蝕まれた虹」が発表され、月末には新聞の文芸時評欄においていくつかの評が出た。新人賞選考会で美代子を強

く推し、一九七一年の小説ベスト・スリーに、大岡昇平「レイテ戦記」、開高健「夏の闇」と並んで小林美代子の「髪の花」をあげた江藤淳は美代子の死をこう悼んだ。

いったい作品とは、文壇生活者の書くものであるのか、それとも人間が書くものであろうか。『夏目漱石』を書いて以来十八年間そう思いくらして来た私は、ためらうことなく小林氏の『髪の花』を「群像」新人賞に推した。そして、氏が受賞したことを心から喜ぶと同時に、この受賞に果たして氏が耐えられるかどうかを、ひそかに危ぶんでも来た。いま氏の遺稿に接して、私は自責と痛恨の念が胸を嘔むのを、とどめることができない。

江藤淳「学芸」『毎日新聞』一九七三年十月二十九日

新人賞を受賞する前、美代子は保高德蔵が主宰する同人誌『文芸首都』で小説をいくつか発表していて、遺稿「蝕まれた虹」が掲載された『群像』十一月号には、夫と共に同人誌『文芸首都』の運営にあたった保高みさ子による追悼文が載っており、小林美代子の人となりが偲ばれている。彼女には間の抜けたところがあって、受賞の祝いに貰ったウイスキーを、仕事を頼みに来た編集者に、ビールのコップになみなみ注いでそれだけ出した話だとか、週刊誌の取材が午後三時まで続いたのでお腹が空いて困ったと言う美代子に、保高が「そんな時にはおそばでもとって、二人で一緒に食べればいいのに」と教えてあげると、美代子は、まるで素晴らしい答案でも見せられたように大喜びした話などが回想されている。中上健次も彼女のそういう欠落を愛したひとりであった。

中上健次も小林美代子と同様に創作活動のはじまりは『文芸首都』で、美代子と同時期に『文芸首都』で文学修行し、その同人活動を通じて美代子とは交流があった。美代子の死に際しての追悼文中上は次のように思い出を語る。

ぼくの家へくると言うので、国立の駅までむかえにいくと、顔よりもおおきい大きな帽子のようなかつらをかぶり、黒のエナメルの手さげをもって、上等のかっこうでやってきた。ぼくはそんな小林さんをむしろ好きだった。

中上健次「方位」『日本読書新聞』一九七三年九月十七日

「十九歳の地図」は一九七三年六月に『文藝』に発表された小説で、新聞配達店で住み込みとして働く十九歳の予備校生がいたずら電話をあちらこちらに掛けて沸き上がる鬱憤を抱えこむ話であり、主人公と同室の男にだまされ金を巻き上げられる老婆として「かさぶた

だらけの「マリアさま」が登場する。このモデルとなったのが小林美代子で、作中には「うじ虫のように生きてそれをうりものにしてるのならさつさと首でもくくって死んでしまったらどうだよ」との表現もあった。もちろん中上に美代子を貶める意図はなく、小説をよく読めば美代子への逆説的な愛情表現であると分かるのだが、この小説を読んだ彼女は中上と喧嘩し、音信が途絶えたという。美代子は小学校の恩師への手紙でこの件について、「文学のことで口惜しいことをされ、お互い世間に名を知られているので泥仕合もできず、誰にもぶちまけようもなく、(中略)その口惜しさを文学に生かすことで、相手に感謝しようと考え心を静めるべく努力しております」(小林滯子『歴訪の作家たち』)と綴っている。中上は前掲の追悼文で「作家小林美代子氏ではなく、小説を書く小林美代子さんということを考えて、つらくてしょうがない。小説など書かないほうがよかった」と彼女の死を嘆き、「髪の花」について「戦後の小説の中で数少い傑作であることはたしかだ。(中略)いまあらためて、諸文芸誌を読み、「髪の花」を読み比べてみると、月々出る幾多の小説など五年もたてばかばかしくなるだろうと感じる。「髪の花」は、小林さんの体が腐乱するようには腐りはしない」と美代子の作品を讃えた。

そんな中上も受賞後に唯一発表された長編小説『繭となった女』については追悼文中で、「ぼくにはいやな部分の多い小説だった。「関係」をこんなふうにも書くもんじゃない、人を裁く資格などあるものか、と思った」と厳しい評価を下した。

『繭となった女』は一九七二年に出版された長編小説で、自身の生誕から群像新人文芸賞を受賞するまでの半生が綴られた自伝的小説である。小説中では男との恋愛と堕胎が描かれる箇所があるが、美代子は複数のインタビューで、「私は一度も恋を経験していません」「私は女よろこびを知らないできた。かつえるように恋を求めたときもあったが、いつも片思いに終って」などと答えており、作中の出来事との齟齬もある。けれども大部分は事実に沿っているものと思われる。『繭となった女』で書かれた内容を中心に小林美代子の人生を振り返ってみよう。

一九一七年に岩手県釜石で生まれた。家は使用人が何人もいるほどの繁盛した茶舗であったが、七歳の時、店を切り盛りしていた母が癌を病む。これが転落の切っ掛けで、母の希望で母の故郷の福島県保原に一家は引っ越した。そこでも茶を売って生計を立てようとするが、寒村での商売は上手くいかず、以後一家は食う物にも困る生活が続く。そんな貧困から逃げ出すように、美代子は十二歳の時、尋常高等科を中退して上京する。上の兄弟がすでに東京に来ていたものの、学歴も伝手もない美代子は、子守、喫茶ガール、女給など

の不安定な仕事を転々とする。けれど戦争が大きくなり軍需工場で働きだしたことが人生の転機となった。初めは女工の身分だったが、事務員に抜擢されたのを切っ掛けにして、終業後の夜、速記者養成の塾に通うことにする。二百人のうち卒業試験に合格したのはたった五人だったそうだが、難関を突破して速記者の資格を得た美代子は、一九四四年二十九歳で大日本鋳業の速記者募集の求人に応募した。この時の求人では学歴として高等女学校卒が求められていたので、尋常高等科中退の美代子は福島高女卒と学歴を偽った。「私たち階級からはこうでもしないかぎり、したい仕事に絶対つけない社会のしくみになっている。そんな壁はこちらから破って進むしかない」、そんな覚悟で採用試験に挑んだ。専門職として高給取りの速記者になった後は、東京大空襲で住んでいた貸間が全焼し九死に一生を得るものの、会社の寮に疎開し、戦後も同じ会社で働きつづけ、東京三鷹に家を買った。いっけん人生は順調に思えたが、頼れる人もない寂しさもあり、会社でも孤立しがちだった。影を落としていたのは身内のことで、一家は離散状態にあり、きょうだい二人が精神病院で死をむかえている。三十代の終わり頃からメニエール病を患うようになり数度入院、病気が原因で四十過ぎで会社を退職してしまう。生活費を稼ごうと、平屋の自宅を二階建てに改築し間貸しをする計画を立てた。ところが近所の家はみな平屋だったので、日照の問題から二階建てへの改築に対して、猛烈な抗議を受けてしまう。それでも美代子は工事を強行するが、改築完成後も近所との軋轢はつづき、持病のメニエール病でのめまいも相まって、精神的負担から美代子は精神を病んでしまった。この辺の経緯と発病時の病状は、短編小説「幻境」に詳しい。

「幻境」は、『文芸首都』一九六六年九月号に発表された処女作「精神病院」を加筆し改題の上、単行本『髪の花』に収録された小説で、美代子が入院中に自らが「正常」であることを証明するために書いたものである。主に描かれるのは病院での生活で、数回にわたる主人公と医師との会話が記述の中心となっており、「髪の花」に見られた告発の趣きはない。小説によると、発病前後の様子はこのようなものだ。二階建て改築工事に反対する近所の人たちから、私道に垣根をしてふさがれたり、留守の間に剥がされた板が玄関に立てかけてあったりする嫌がらせを受け、斜面に立つ家なので雨水が隣りの家に流れ込まないように、夜になると近所の人垣根を超えて忍び込み庭の土を削ってゆく。嫌がらせはだんだんと過激になり、電流のようなものをベッドの側の壁から流されたり、間借人から鍵を預かった近所の人交代で泊まり込んできて、上下三方の部屋から電流を流される。嫌がらせのため不眠と緊張の毎日が続き、ある日、家で寝っていると近所の人から覗かれているような気がして、「今の

うちに殺してしまえ」と声が聞こえた。驚いて寝巻の上にオーバー二枚を重ね着して台所から飛び出し弟の家に向かう。道すがら狂人と思われているのではないかと心配になり、いったん家に帰って身なりを整え、再び弟を訪れた。弟家族は異変に気付き、精神病院へ入院する手筈を整えてくれ、入院生活が始まった。

いったいどこまでが実際にあったことで、どこからが病気による妄想なのかはつきりしないのだが、持病のメニエール病と近所との軋轢で参ってしまった、精神を病んだことはよく分かる。美代子は結局、精神病院に五年間も入院することになってしまった。退院後は『文芸首都』の同人活動に積極的に取り組み、四篇の小説を発表する。主宰者保高德蔵が病に伏し『文芸首都』は終刊。一九七〇年一月発行の終刊記念号に美代子は次のような文章を寄せている。

文芸首都は私に贅沢な遊びを楽しませてくれた。首都は私に、心の中を散歩する道を教えてくれ、その散歩の過程を書いたものを活字にしてくれた。(中略)そんな贅沢な集りも終わったけれど、首都によって得たものを、どのように開花させるか、それが私の今後の課題である。

小林美代子「贅沢」

この後、小林美代子は「髪の花」を群像新人文芸賞に応募し、実際に「開花」させたのだった。

*

一九七三年四月六日、朝日新聞に一通の投書が掲載された。三十四歳の主婦は「保安処分に患者は団結せよ」という題で、当時議論されていた精神病患者を予防的に拘禁する保安処分導入への反対と患者の団結を訴え、同病者から手紙をいただきたいとして投書の最後に連絡先の住所を載せた。これを見た小林美代子はさっそく手紙を出し、主婦は全国から集まった同志で「友の会」を結成する。『鉄格子の中から——精神医療はこれでよいのか——』は友の会が一九七四年に出版した冊子で、精神医療の問題点や保安処分にまつわる議論などがまとめられていて、そこに小林美代子についての章がある。主婦は一九七三年四月から八月までの五ヶ月間の美代子との交流を手紙や電話の内容とともに詳細に述べており、それによると美代子は友の会ができたばかりの頃、「恥を曝してやるのですからね」「負い目を自覚した上で」などと発言していて、彼女の病気への認識が窺われる。また八月五日に美代子は主婦の家に電話をかけるが、なぜか通話中に電話が切れてしまう。それを切っ掛けに美代子は盗聴と警察からの介入を心配しだした。八月九日には差出人が「山田

友子」となっている手紙が主婦に届き、開封してみると中身は美代子からのもので、「精神科医が警察の命令によって私を入院させ、ロボトミーをされたらと思うと非常に恐ろしくなりました。(中略) 私は警察が精神病院を動かしていると思うようになっております」と怯えた内容が書かれていた。八月十一日の手紙ではロボトミー手術についての恐怖を延々と述べ、手紙の最後には「精神科の薬を飲むと鋭い小説が書けないので、三日前から止めて、睡眠薬で眠っています。再発するかもしれませんが、(中略)精神科の薬を飲むとぼんやりして、書いてもしようがないような小説にしかならないので、すべてをここで文学に賭けてみようと思っています」と薬も飲まずに執筆に取り組む様子が書かれていた。主婦のもとに最後に届いた美代子の手紙を引用しよう。

やっぱり盗聴でしたね。盗聴されるような素晴らしいシヨツキングな話もないのですのね!

私に友の会から手を引けとでもいうのでしょうか? しばらく友の会の出席を休ませていただきますね。あんまりでしゃばりすぎ、かき廻しすぎ、しゃべり過ぎたようです。

おとなしく小説ざんまいに過します。私の所にも、友の会の発展をいのる、力添えしてやって欲しいなど、きています。御健闘をかねながら御祈りします。

なお○○氏の原稿の件かたづきましたのでどうぞ御心配なく。色々御心配をおかけいたしました。

今何の薬も飲んでなく、気持も澄んで、よく仕事ができます。何の薬でも薬はあまりよくないですね。心臓は驚くほど丈夫で、血圧も低すぎるくらいということで(引用者注……美代子は高血圧の持病があった)、元気に仕事を続けていますので御安心下さいますように。あなた様も、友の会も、前途多難なところになさしかかっているようでございます。充分御身体に御留意の上、友の会の御活動見守らせていただきます。

なお頭の方も大学病院で診ていただきましたが、入院も薬も必要なし、気楽に小説を書きなさいということで安心致しました。

今日は出版社の人達と食べ、飲み歩きまわり、楽しく、盗聴のいまいましては忘れました。

私は小説の上で、精障者の立場を、人権問題を書いて行くことに致しましょう。

48・8・16

小林美代子

前掲の保高みさ子の追悼文によると、美代子は八月十八日の午前
に友人に電話をしており、「昨日一日かかって保高さんやあなた達
に遺書を書いたの。今日の三時に遠い旅に出ます。出たらもう帰ら
ない。これが最後よ」と伝えていたそうなので、この言葉どおりに
十八日に自殺したとすると、手紙は死の二日前に書かれたことにな
る。

小林美代子の葬儀では、火葬場に親族三人、東京都精神障害者を
守る家族会から四人、友の会四人、計十一人が駆けつけ、寂しく骨
を上げたという。遺体発見時、枕元に置かれていた遺書は便箋にサ
インペンで走り書きしたもので、「笑ってください。死にます。私
はほんとうのことを叫び通してきました。私の銀行預金五十万円は
精神障害者友の会に寄付して下さい」と書かれていた。

■終わりの後に

二〇一四年二月、長らく書店に並ぶことのなかった小林美代子の
本がある出版社から出版された。かつての小説集『髪の花』に掲
載された小説と、『文芸首都』に載ったエッセイ、さらに表題作と
して遺稿となった「蝕まれた虹」を収録した単行本『蝕まれた虹』
の巻末には「小林美代子様作品の著作権者・著作権継承者を探し
ています」と記載され、著作権法の規定に従い、「著作権者不明等
の場合の裁定制度」を用い、文化庁長官による裁定によって著作権
者不明のまま再び世に出ることになった。

遺作「蝕まれた虹」は静かに困難を受忍する小説だ。「髪の花」
において主人公ふさ子は抗っていた。ふさ子にとっての社会である
病院に対して楯突き、自らの運命に対しても脱出の手段を求めても
がいていた。奇蹟が起きて今までの不幸すべてが救われる時を待ち
のぞんで、病院の外に宛てて手紙を書いた。しかし「蝕まれた虹」
において、主人公の「私」はただ現実に従うのみである。

「蝕まれた虹」は四十ページほどの短編小説で、精神を病んだ者の
家族やその当事者が、文学賞を取りやはり精神病患者である主人公
「私」のところに次々と相談にやってくる。誰が来ても「私」は追
い返すことをせず、誠意を持って対応する。相談者の苦悩がまるで
自分のことのように感じられ、「私」は体調を崩して下痢続き
だ。しかし、「私は小説が本になったことで、社会に生きる場を与
えられている。幸せと言うべきだろう」と自分の役割を自覚するか
のように、病者やその家族に向き合い、時に自分を責める。相手の
様子次第で深刻になったり突き放して考えてしまったりする自分
について、「ずるい」と感じる。患者の苦しみを救うための行動から
逃げていると思っているからだ。病気の症状に悩む者には、医者の
指示どおりに薬を飲んで、時に入院することを勧める。やがて「私」

自身にも異変が起こってきて、訪問先の建物や銭湯で変な行動をとってしまったり、幻聴が聞こえ出したりして、「私を正気と狂気が奪い合いしている」のを実感した「私」はスーツケースに日用品を詰め、自ら病院へと向かう。医師に入院を願い出て、五年ぶりに入院した。病棟にはかつての病友たちがそのままいて小説の最後で「私」は祈る。「私の家に相談にきた人々の為に、この病棟の人たちの為に、自分の為に、何ものかに向って祈りつづけ、許しを乞うた」。果たして、祈りは通じたのであろうか。

死の間際、精神病院をあれほど恐れ憎んでいた美代子であったが、遺作ではあたかも救済の場所であるかのように病院が描かれている。作中の主人公は、病院仲間に文学賞のことを尋ねられ、「間違えて貰っちゃったらしいわ、当選役は勿論、人間役がこなせなかった。私はもともとこの住人なのよ」と答える。「私」にとって、病院こそが自らの本来なのであり、その外での生活は日常ではなかった。美代子は結局、小説家として世に出たが、病気の外側に自己を規定することができなかった。病気は根を張り、アイデンティティそのものとなっていた。小説を書いて新人賞を取り、さらに自伝を世に問うた。困難を受け入れる作業は一通り終え、美代子はその困難と共に歩むことを選んだ。自伝小説『繭となった女』は決して高く評価されたものではなかったが、美代子自身が自分を再構築するには必要な小説だったのだろう。抗うことはもうない。諦念とともに現実を静かに潜行していく。「蝕まれた虹」における祈りは、「髪の花」のそれとは性質が異なってくる。待つべき奇蹟はもうどこにもないのだ。奇蹟による救済を祈るのではなく、心の穏やかさを確かめるように祈る。静かな祈りはすべてを受け入れる。

実際の小林美代子は遺稿「蝕まれた虹」の主人公とは違い、なお現実と格闘し、死を選んだ。その自殺について考える時、宮澤賢治の「よだかの星」に何かしらの手がかりがあるように思う。醜く鳥たちに嫌われていたよだかはある時、鷹に名前を変えるよう脅される。それを拒否すると鷹に殺すと言われ、兄弟である川せみに別れを告げた後、空に向かって飛び続け、最後は星となるのであった。これをよだかにとつての救済の物語を捉えることは容易だが、よだかは結局、鳥の世界での名誉回復を得ることはできなかったのだ。救済は、星として生まれ変わった死後に訪れたのである。よだかは現実には立ち向かうことを諦め、死の可能性に賭けた。よだかにとって死は敗北ではなかったのである。星という永遠に自分を顕示する手段が手に入ったからだ。詩人にとって、星としての救済を望むのであれば、それは死後も自分の残した作品が読まれることだろう。詩人であろうとも、その自殺が衝動的なものであれ、計画的であれ、最後の選択は悩み苦しんだ果てのものだ。けれども、彼が詩人で

なかったらば、それでも死を選んだのだろうか。詩人であること
の自覚が、ある種のうぬぼれとともに、自死に導いたのではないか。
苦しみは作品の力を信じさせたのである。よだかは星になろうと徘徊
した末、自らの意志で空高く昇っていき、命と引き換えに星とな
り榮譽を得た。詩人であるからこそ、詩のために試行錯誤し、最後、
死に委ねようとするのではないか。小林美代子は小説家であったか
らこそ、死が近づいたのか。プラトンをひもところ、詩と死につい
て考えるために。

*

紀元前三九九九年春、ソクラテスは「国家公認の神々を拝まず、青
年を腐敗させる」という罪状で死刑判決を受ける。裁判のちょうど
前日、デロス島へ送る船の船尾に花飾りがつけられた。テセウスが
クノッソスの迷宮でミノタウロスを倒したことをアポロンに感謝す
るため、毎年アテナイ人はデロス島の祭に使節を派遣していた。船
に花飾りをつけてから、再び船がアテナイに戻ってくるまで、その
期間中は、国を清浄に保ち、何人たりとも国法の名のもとに処刑し
てはいけない。ソクラテスは判決の後、長い時間を牢獄で過ごした。

監獄にいるソクラテスのもとには、彼を慕う若者や友人が毎日訪
れていた。デロス島からの船が帰ってきたとの知らせがアテナイに
届いた日、彼らは連絡を取り合い、翌日、朝早くにソクラテスのと
ころに集うことにする。ソクラテス人生最後の日、夕刻に毒をあお
るまでの一日のあいだ、ソクラテスたちは魂の問題について討議す
る。

プラトンが書いた『パイドン』によると、テーバイ生まれでピタ
ゴラス派の哲学者ピロラオスに学んだケベスは、死を魂の肉体から
の解放であると説くソクラテスに、疑問を投げかける。

魂は肉体から分離されると、もはやどこにも存在しないのでは
ないか。それは、人が死んだその日に、肉体から離されるとす
ぐに、滅びてなくなってしまうのではないか。そして、息か煙
のように外に出て行き、散り散りになって飛び去ってゆき、も
はやどこにも存在しないのではないか。

プラトン『パイドン』（岩田靖夫訳）

ソクラテスはこれに答えるかたちで、イデア論を展開しながら、
魂の不滅と輪廻転生を語る。けれども、もしケベスの言うように、
死によって肉体だけでなく、その魂も亡び、死とは無に帰ることだ
としたら、死は詩人に何をもたらすか。

魂は肉体という牢獄に縛られている。魂自身が自らのみを抛り所

にしてもものを考えることはできず、常に肉体が受ける刺激に影響されている。精神は、純粹に精神だけで存在することはできない。肉体と不可分にあるのだ。詩は確かに魂の活動だろう。しかしその精神活動の記述も詩人の肉体を通して、外の世界に刻まれたものなのであり、肉体から解放された詩も同様に存在しない。魂が肉体に拘束されているのと同じように、詩もまた詩人の肉体に結びつけられ、つまり詩は常に詩人という拘束具を身にまとっている。詩のみが世界に屹立することはできない。そこには詩人が立っているのだ。たとえば詩人の名が忘れさられ、詩のみが残ろうとも、あるいは匿名の者たちによって集合的に作られた詩であれ、詩は詩人という肉体とともにある。詩とは詩人の魂の問題に還元される。詩を読むこと、それは詩人について知ることでもあり、詩人の魂を探る行為なのだ。詩は魂に囚われている。

死は魂を物質的な肉体から解放する。ソクラテスは魂の不死を信じ、死を恐れなかったが、魂が死と一緒に消滅するのだとしても、魂が解放されることには変わらない。肉体が減び、残されるのは魂の活動記録である。生前、いろいろなところに刻みつけられた痕跡を通じて、魂がいかにあつたか知ることができる。詩もまた詩人の魂の記録として世に残る。詩は確かに魂がなした刻印ではあるのだが、詩人の死はその肉体を觀念上の存在へと押し上げる。詩人が生きているあいだ、詩は詩人の立ち振る舞いに惑わされつづける。詩人の言動が詩を汚染していくのだ。詩人の死によって、詩は形而下の災いからは切り離されて、魂のより露わな姿を見せることができるようになる。詩人が死んではじめて、詩を通じて、詩人の魂の本当のあり様が見えてくるのだ。魂とは形而上のものであり、詩人の死の後、詩人の肉体と、その詩もまた形而上に所在するものとなる。かくして詩は浄化されるのだ。

詩人の肉体を形而上へと昇華すること。詩人が死ぬことは、詩にとって意味を持つ。死そのものは人間を無に帰す。死んだらお終いだと言う人もいる。しかし死者が詩を残していれば、死は詩を自由にし、その詩によって死にも意味がもたらされる。死の恐怖、すべてがなくなり無意味になってしまうことへの恐れが、人を詩作に向かわせる。詩を詠むことは、死への準備なのだ。詩人は命と引き換えに、詩を解放しその肉体を觀念の世界に生きながらえさせる。詩の作者は、詩人が死んではじめて概念的に成立しうるのだ。

困難にある者が詩を作ること。その場合、詩作とは世界を変えられない者が世界にむけて記述する行為である。虐げられどこまでも無力な自分が詩を作る。その無力さこそが、祈りを強くし、詩をより尊い地位まで引き上げようとする。肉体としてある自分に絶望していようとも、詩は世界に届くのではなからうか。形而下にある肉

体と、自らの魂の地位との落差が詩作について切実さを増す。死を前にしたソクラテスと同じように、詩の可能性を信じることの特権を得た困難者は、死を怖がらない。肉体の汚辱から詩は解放され、詩が詩人の魂と直結する時、詩の力によって自らの肉体は形而上の存在へと生まれ変わる。詩作した困難者だけが、他の苦難の者たちとは差別され、尊ばれるだろう。死を選ぶことは、仲間への裏切りでもある。自分だけが助かるうとする卑怯。詩人となること。救われること。救済は自分だけを特別な存在へと仕立てるのだ。

詩人になろうとすることが、自らだけへの救済を願うことが、後ろ冷たいものであるほど、魂は傷つき、詩もまたその傷跡を背負う。傷と祈りから作られた詩が、超越していくことがある。詩人だけを救済するにとどまらず、その傷が形而上のものへと昇りつめていくなかで、世界にたいしても刻印を刻む。世界を記述する文法が変化し、かつて同様の苦難を味わった者たちに祝福がもたらされるとしたら。物質的な肉体としての詩人が例え敗北者であったとしても、詩が勝利する時、詩人は困難にあるすべての不幸を背負い、苦しんでいる皆に救済が訪れよう。

ソクラテスが死後も魂が存在することを説き伏せた後、それでもケベスは反論する。たしかに死んだ後も魂は消えずに残るのだろう。他の生命へと転生するのも理解できる。ただ何度も輪廻転生を繰り返した後、肉体を着潰すうちに疲労し、ついには衰弱の果て、魂は消滅してしまうのではないか。ケベスの疑義は、詩と詩人についても当てはまる。詩人の死によって、詩人の肉体は観念上のものとなり、詩の永遠が約束されたように思えるだろう。詩と詩人の魂は、芸術として誰にも穢されず輝きつづけるだろうと。たとえばギリシヤ悲劇について思い出すなら、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデス、この三者が書き残した三十三作品のみが今、古典としての栄誉の地位を約束されている。果たして、生き残ったソポクレスらの永遠を信じるのは可能だろうか。この先、人類が減びない限り、消えていった幾百幾千の悲劇とは違って、これらの詩は、勝利を永久に掲げ続けるようにも錯覚する。けれどきつといつか、栄光をまとった詩も読まれなくなるだろう。ただの記録としてのみ残り、切実な読書の対象からは忘れ去られる時代は来るはずだ。すべての詩にも死の時はある。死が本質的に持っている無意味さからどう逃れるか。享楽と虚飾がそれを感じにくくさせる。いや、詩に価値があるのは、無意味さに向き合っているからだ。その結論が死に向かおうと、生きることの糧になろうと、文学は霧散してしまいうような意味の無さを取り扱い、渴望する魂をなだめようとする。もういちど、文学の価値を信じること。ソクラテスが魂の永遠を信じたように、あり得ない永遠があると信じること。詩人は、奇蹟を待つように、

文学による復活を願い、詩を綴る。

*

小林美代子は、自伝を書いた困難者その後の人生について、二通りの生き方を示したと思う。自伝を世に出しても困難が解決するわけでもないのは当然で、困難にある人は不幸の原因と付き合っていく必要がある。「蝕まれた虹」のように格闘することをやめ現実に沿い受け入れて静かに祈る、あたかも余生のような人生。もうひとつは、実際の美代子のように最後まで現実と闘いつづける人生である。ただ美代子は闘いをつづける粘りを持っていなかった。また社会も彼女の闘いには向き合おうとしていなかった。

美代子の死は、いくつかの週刊誌で記事となった。一九七三年九月二十四日号の『週刊文春』では、近所の主婦の声として「あたくしたちも、顔をあわせたときは、笑ってごあいさつしたり、世間話はしてました。でも親しいおつきあいなんてとても……だって恐いですものねえ」と紹介している。受賞後、美代子は近隣の人たちからも注目される存在となり、「作品の内容をじっくり読んで知ってみたいというような人はなく、ほとんどの人が、恐いもの見たさの好奇心だけから、半分逃げ腰になりながら、小林さんの日常をのぞき見することになった」と近所の人の態度が記事には書かれていて、「受賞したときから、世間は小林さんの傷に深い興味をよせたのだ。心を病んだ人という抜きさしならぬ痛手、これゆえ社会は彼女に関心を払ったのだ」と、美代子の小説が当時どう社会に受容されたのかの評がある。記事によると受賞後いろいろな雑誌が小林に「精神病院モノ」を発注したそうで、小林美代子という小説家に何が求められていたのか垣間見ることができる。彼女には、狂気を描くこと、狂気の人間が収容された異界の場所について報告することが期待されており、また精神の病に苦しむ者たちからの救いを願う相談も、美代子に小説家であることよりも、精神病患者としての自覚と活躍を要求していた。

小林美代子の受賞と単行本が長期にわたって版を重ねたのも、このような社会状況があったからこそで、いちど絶版となった彼女の小説がふたたび書店に並んでいる偶然について考えたい。今、あらためて彼女の小説を読む意義をひとつあげるならば、困難にあった者が何を書くのか、なぜ書くのか、それを知ることができるからだと思う。文学賞を取らなくても、インターネットを使い世に向けて文章を公表することが可能である時代になったし、そこでは困難者による切実な文章が溢れている。だが、彼らのほとんどはその書いた文章で賞賛を得られることはないのだ。賞を取らなかつた「小林美代子」について考えてみよう。困難を受け入れながら自分を再構

築する作業は、完遂されることなく、困難にそれでも抗い、忸怩たる思いとともに生活を送っているのだろう。満たされるころはどこにもないのだ。けれど、その満たされなさは未来への希望に繋がる。今、得られないものがあるからこそ、将来、獲得できる果実があるかもしれない、そんな奇蹟を祈り待つのだ。死の直前の小林美代子も確かに足掻いていた。同時に賞の栄誉と自伝を出版した過程が彼女を何かしら満たすところがあったのも事実だろう。友人に手紙を書いたおとしまでは現実と闘う気持ちを持っていたが、その日は違った。「蝕まれた虹」における、諦念を伴った「私」の心境と同様のものを持ってしまった。そして死んだ。困難にありながらも生きていく動機とは、現実を認めないことなのだと思う。小林美代子にはなれない、物書く困難者は、現実から認められないから、現実を否認し、困難と闘うことができる。それは生への原動力となる。文章を書くことの当たり籤は、困難にある者にとっての、新しい不幸となるだろう。

「蝕まれた虹」の「私」は病院に入院する準備を終えた後、部屋を見回す。

五年間の正気の生活の跡を見回した。

毎日、いんげん、トマトなどを盛りつけ、洗った皿小鉢、魚一切を煮た小鍋、私は、もうお前さんたちを使いこなせなくなった。肉屋の腐った肉より劣る狂人になった。まだ挨拶だけ是可以るのよ、永久にさようなら……。と少し笑う。

文学賞の受賞を伝えてきた電話、原稿の書直しを命ぜられた電話、三畳からあふれ出た沢山のお祝いの言葉。お祝いのおくるみ人形。イヨネスコ全集。

昼間から電灯をつけて毎日向かった机。沢山の言葉が浮び、消され、書かれていった。時に絶望し、焦慮し、虚脱感に襲われた。メニエル氏病の目まい止めの薬と水の入ったコップを机に置いて、発作に備えたりした。

その絶望もここでは王冠のように輝いていた。

小林美代子「蝕まれた虹」

輝いていた王冠は、文学賞によって得た名誉ではない。あがくように文章を書き、生活してきたこれまでの毎日だ。小林美代子が残した詩がはたして詩人の死後の勝利を獲得したのか、断言する自信はない。詩人としても敗北だったかもしれない。しかし、彼女は絶望にそそのかされるように書くことで、王冠を得ることができたのだ。ここにある満たされた思いは困難を受け入れたからこそ得られたものだ。けれど、この場面の美しさの裏側には死があることを忘

れてはいけない。生を終える直前の老人が持つ美しさ、そのかけえなさは死に担保されている。この小説は終焉への準備が描かれている。

困難にある者が、死の充足を選ぶか、現実との対峙を続けるか、それは彼しだいだ。彼は自らの困難について、人生を振り返り、書く。人々に読まれることとその名誉を得たいとは思っているものの、結果として得られなかったとしても、書いた後の人生で祈り続ける。辛く厳しい闘いはいつまでも終わらない。その現実には抗っていくための祈り。

つらく苦しいことを受け入れること。受け入れたことがつらさにはね返って、つらさを減らすというのではない。そうでないと、受け入れるということの力と純粹さが、それに応じて減ってしまう。というのも、受け入れの目的は、つらく苦しいことをつらく苦しいこととして受け取るのであって、それ以外のことではない。——イワン・カラマゾフにならって、言うことはただひとりの子どものただ一滴の涙をもつぐなうにたるものは何ひとつないと。それにもかかわらず、あらゆる涙を、そして涙よりはるかにまさった無数のおそろしい事柄を受け入れること。これらの事柄には、なにかしらつぐないになるものが含まれているからというので受け入れるのではなく、その事柄自体を受け入れること。それらは存在するからというだけで、それらが存在することを認めること。

シモーヌ・ヴェイユ『重力と恩寵』（田辺保訳）

困難を受け入れることは尊い。しかし、そこには諦めがあるのであるまいか。死の衣裳ゆえの美しさなのではあるまいか。超越へと繋がる可能性を持っているからこそ、その過酷さに人は耐えられないのではあるまいか。書くことが認められてもそうでなくても、満たされない気持ちこそが、現実への抵抗と生への道筋になる。小林美代子の小説に向き合うことは、現代を生きる、多くの困難者に向き合うことだ。インターネットに溢れる言葉の底と通じているものが彼女の小説にはあって、困難に生きる者の表現したいという欲求の数奇な事例として私は単行本『蝕まれた虹』のページをめくり、収められた何作かの作品を読み直すのだ。

〈了〉